

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 8 月 22 日 9:55AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 39,500～45,000 円

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 37,500～45,500 ドル
(S&P500) 5000～6500

[ナスダック]

【当面の想定レンジ】 (ナスダック 100) 20,000～24,000
(ナスダック総合) 18,000～22,000

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 130.000～151.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～102.000

エリオット波動とは

株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均



【週足 エリオット波動分析】

今年 4 月安値(30,792.74 円)以来の上昇はインターミディエイト級第(5)波に当たります。この第(5)波の完成を以て、コロナショック底(16,358.19 円、20 年 3 月)以来のプライマリー③波は完成します。

個人投資家は逆張り姿勢を強めています。

この 4 カ月間余り、信用買い残は約 4.47 兆円(4/4)から約 3.78 兆円(8/15)へ減少する一方、信用売り残は 4641 億円から 1.1 兆円へ増えています。このため信用倍率は 3.41 倍と 23 年 6 月以来の水準へ低下しました。また同じ期間、現物は約 5 兆円を売り越しています。

一方で、海外投資家の積極的な買い姿勢が一段と強まっています。

8 月第 2 週(8/12-15)は現物先物で 1.758 兆円を買い越し、それが日経平均の史上最高値更新の原動力だったことがわかります。ちなみに、この 4 カ月間の買い越し額は現物先物の合計で 8 兆円(現物は 6.5 兆円)に膨らみました。

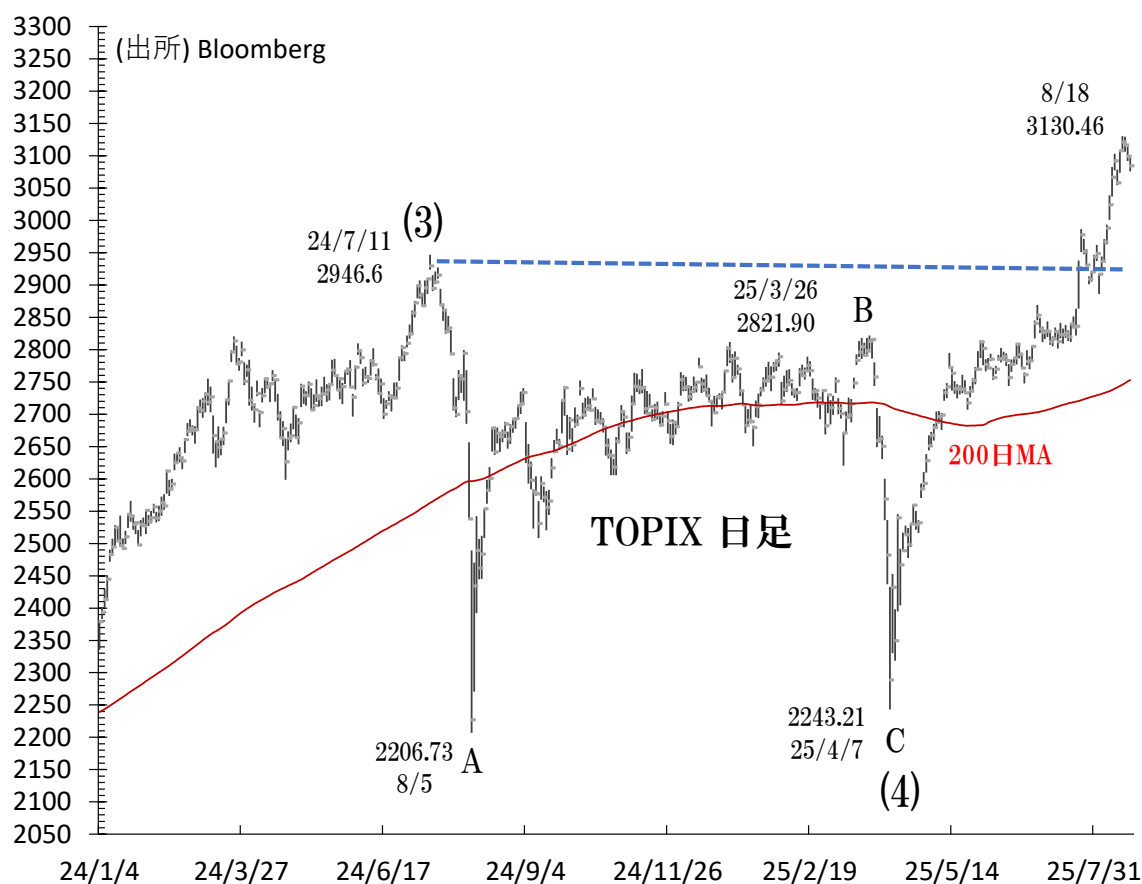
昨年最大買い主体になった事業法人は、4 月第 1 週から 20 週連続で買い越しました。この間の累計は 4.92 兆円に上り、相場をしっかりと下支えしていることがわかります。

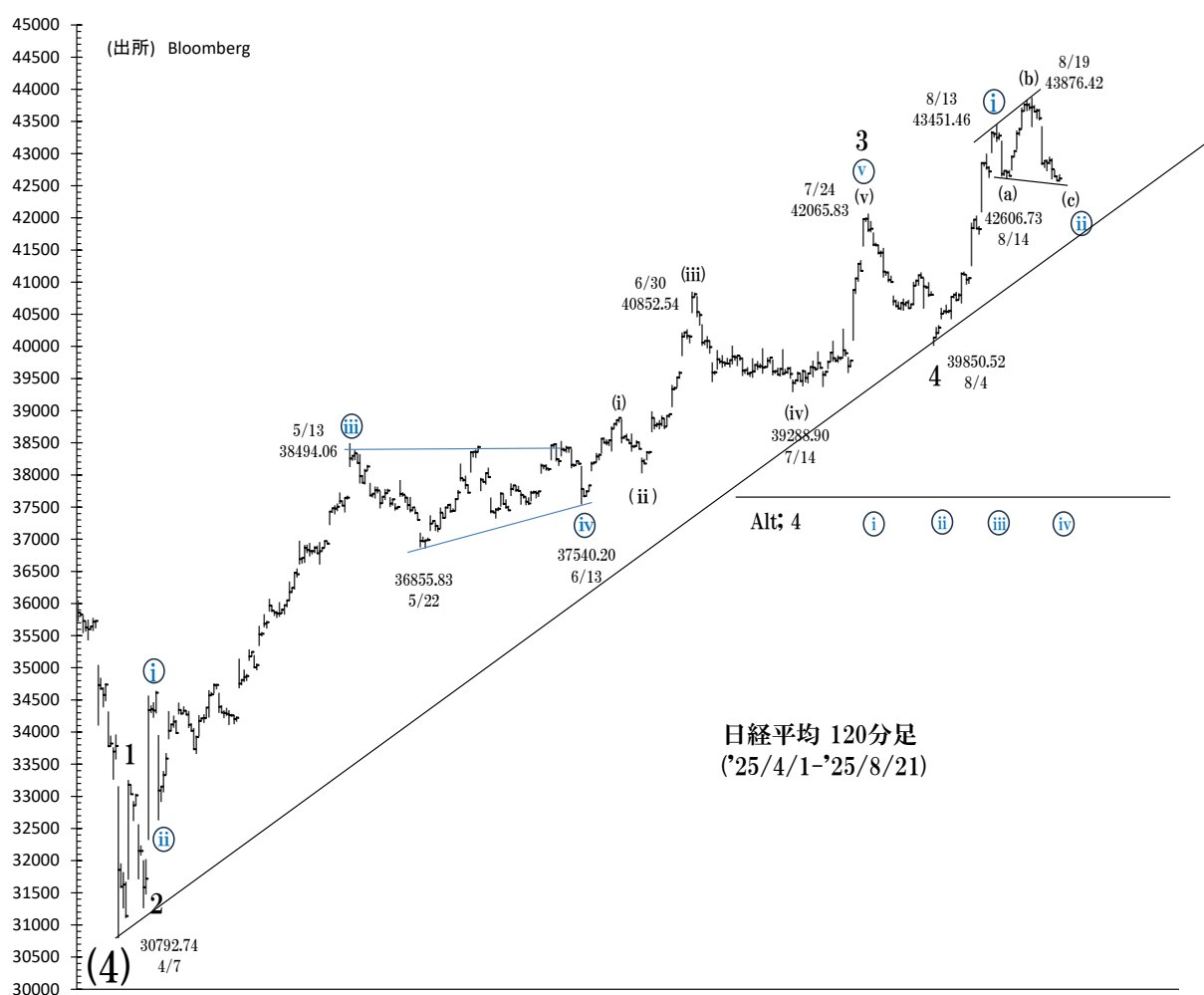
さて、このところ過熱が続いていた騰落レシオが155.2%(8/13)をピークに、低下を始めました(8/21は144.6%)。この動きを以て相場調整の根拠とする見方もありますが、はたしてそうでしょうか？

そもそも騰落レシオは相場の安値発見機能に優れる一方、高値発見機能の信頼性は高いとは言えず、高水準の騰落レシオが低下に転じても株式相場が崩れるとは限りません。最近では4月からの株価急反発に伴い、騰落レシオも5月上旬にかけて146.5%に急上昇し、6月上旬にかけ100%割れ(97.9%)まで大きく低下したことがありました。しかし同じ期間でTOPIXは上昇(2738→2756)しています。

繰り返しますが第(5)波目には、①企業業績や景気などファンダメンタルズは以前より弱め、②平均出来高は少ない、③中小型株が選好されやすい、④先行きへの極端な楽観論、などの特長があります。現在は①～③は揃っていますが、まだ④の状況にあるとは言えません。

極言すれば、懐疑論が強い楽観論に置き換わらない限り第(5)波の強気相場は続くでしょう。筆者は日経平均が9～10月に4万5000円～4万9000円を付けてもおかしくない、とみています。





【日足・時間足 エリオット波動分析】

[TOPIX]

8月8日に初の3000台乗せをはたし、さらに18日には一時3130まで上昇しました。フィボナッチ比率からの目標価格①[3164]に近づいています。なお目標価格②は[3323]です。

[日経平均]

短期の波動カウントにはいくつかのオプションがあります。

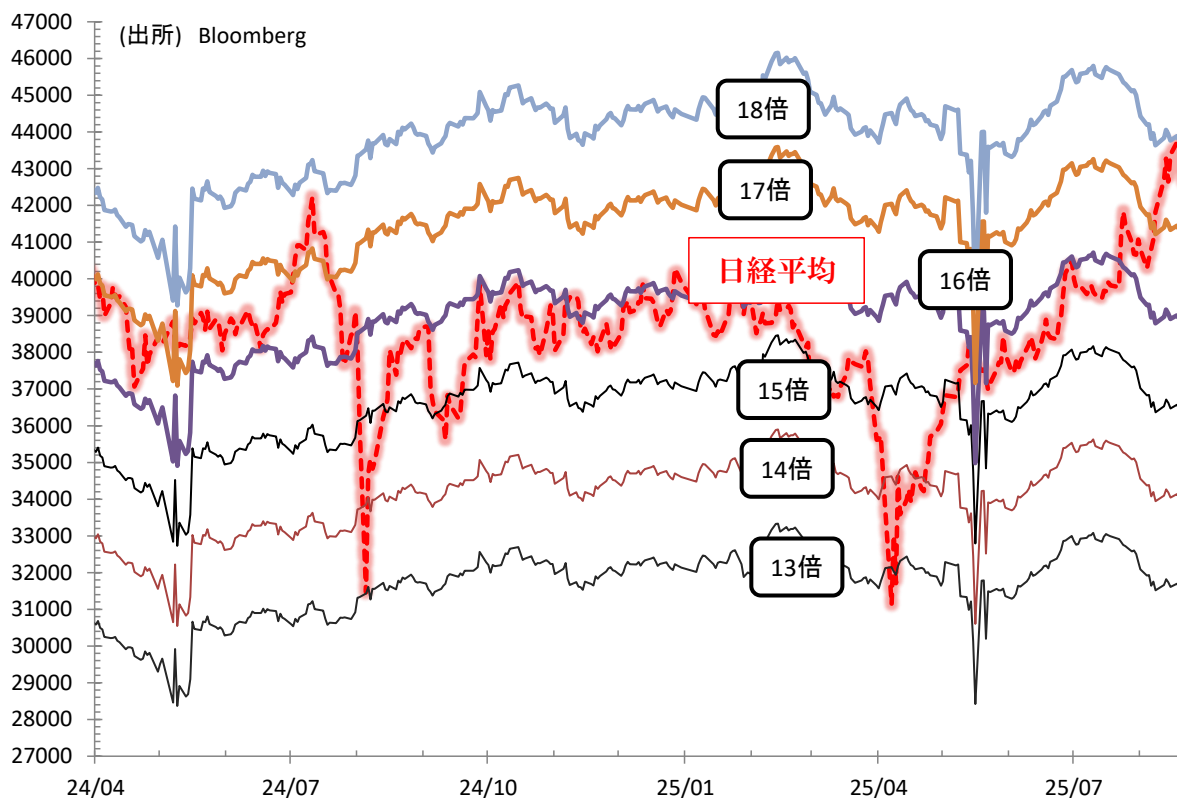
ひとつは、39,850円(8/4安値)からマイナー級・第5波による上昇が進行中というものです。これによれば、マイニュート級のマルii波[(拡大)フラット]はまもなく終わり、マルiii波による上昇局面入りが想定されます。

あるいは、マイナー級の第5波始点を39,288円(7/14安値)に置くこともできるでしょう。足元はマルiv波[フラット]であり、マルii波[ジグザグ](7/24~8/4)とは交互になります。近々始まるマルv波の上昇により最高値更新が期待されますが、それは強気相場の最終波となります。なお、この波動カウントではマルiv波は42,065円(7/24高値)と重なることはありません。

フィボナッチ比率などから得られる第5波の目標価格は以下の通りです。4万5000円処をクリアすると、次の大きな節目として4万9000円処に注目できます(ただし、そこまで上昇する必然性はありません)。**[44,597円][45,230円][48,568円][48,896円][48,964円][49,074円]**

[予想 PER 別の日経平均水準]

8 月 21 日の日経平均予想 PER は 17.65 倍・予想 EPS は 2414 円。今年 2 月 13 日には過去最高の EPS・2564 円を記録しています。



NY ダウ・S&P500



【NY ダウ日足 エリオット波動分析】

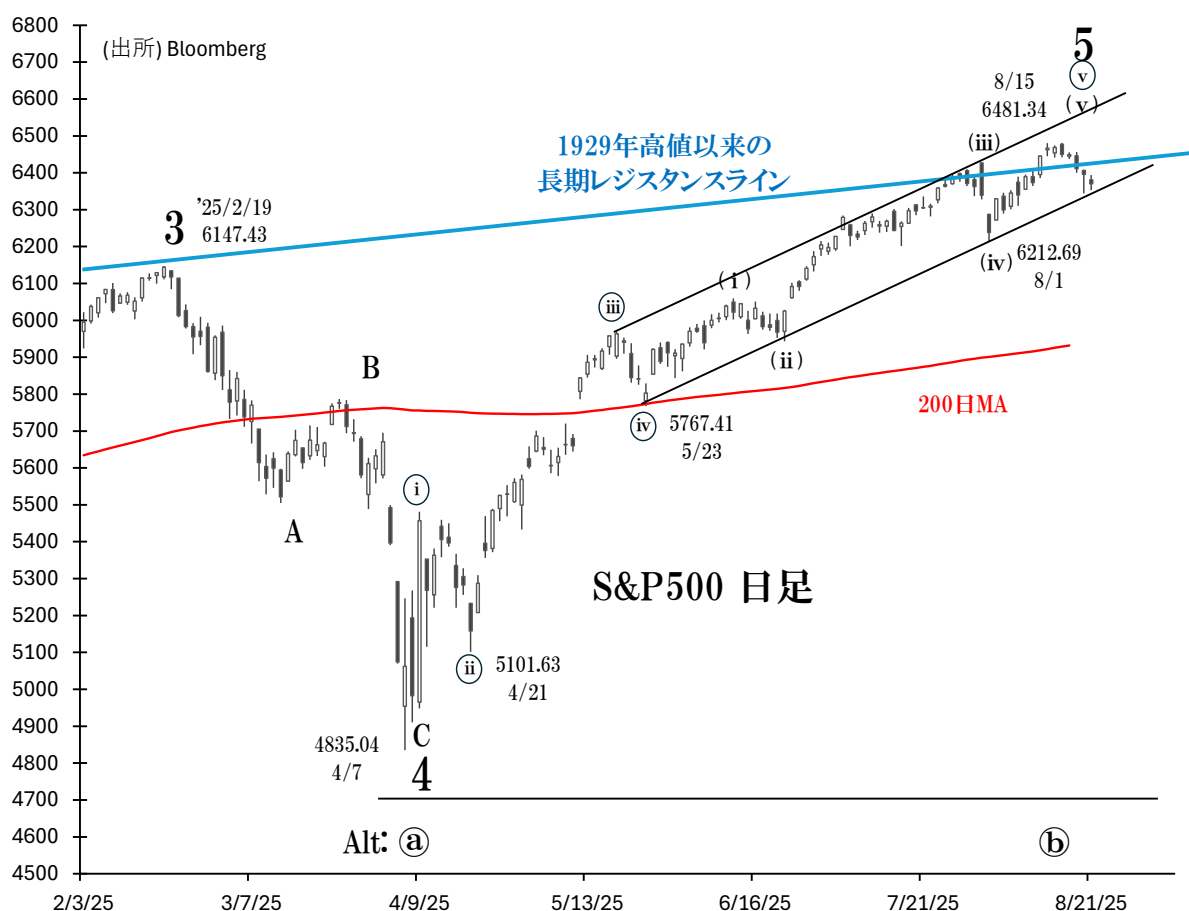
(プリファード・カウント)

22 年 10 月安値(28,660 ドル)からの上昇は、プライマリー級第⑤波による上昇です。今年 4 月安値からはインターミディエイト級第(5)波)に当たり、それを以て第⑤波は終了します。

第⑤波完了後に訪れる弱気相場は、控えめにみても高値から 20%安となるでしょう。

(オルタナティブ・カウント)

4 月からの上昇は「ランニング・トライアングル」における⑥波とカウントされます。このシナリオであれば、近々訪れるとみられる下げ局面においても 4 月安値(36,611 ドル)は維持され、しばらくのみみ合いの後に、新たな高値へ向かう展開があるでしょう。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

7月下旬に、1929年と2000年の高値を通る超長期レジスタンスラインに達しました。前回ケースを振り返ると、S&P500は昨年12月初めに同ラインに到達し、今年2月下旬まで3カ月近くレンジ相場を形成しました。そこから4月底までは一気に20%下げています。このときを参考にすると、S&P500は10月頃まで高値圏でもみ合い、その後には急落が控えていることになります。

FactSetによれば、S&P500の(12カ月先)予想PERは22.1倍(8/8時点)。これは5年平均(19.9倍)より11.5%、10年平均(18.5倍)からは20%、各々「割高」な水準です。ひとたび調整入りとなれば、10%～20%の調整は普通に起きることでしょう。

【S&P500 長期エリオット波動分析】

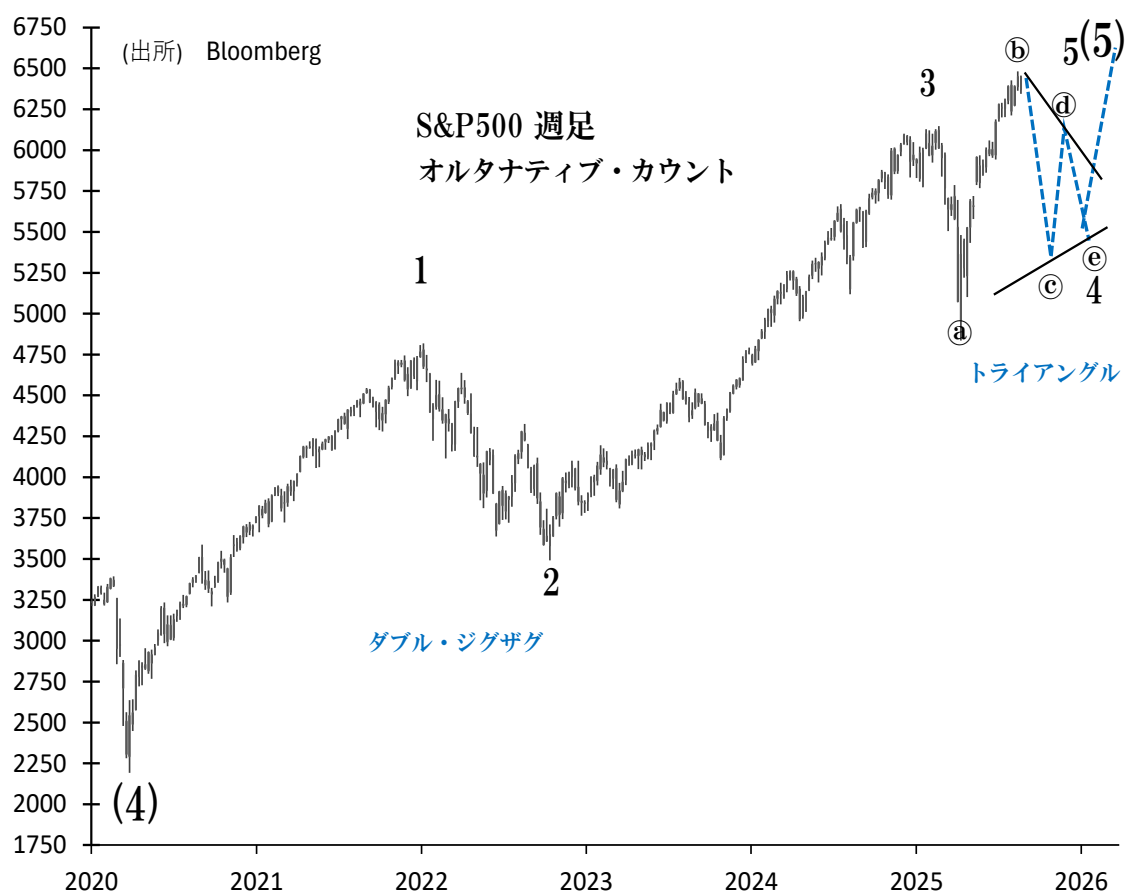
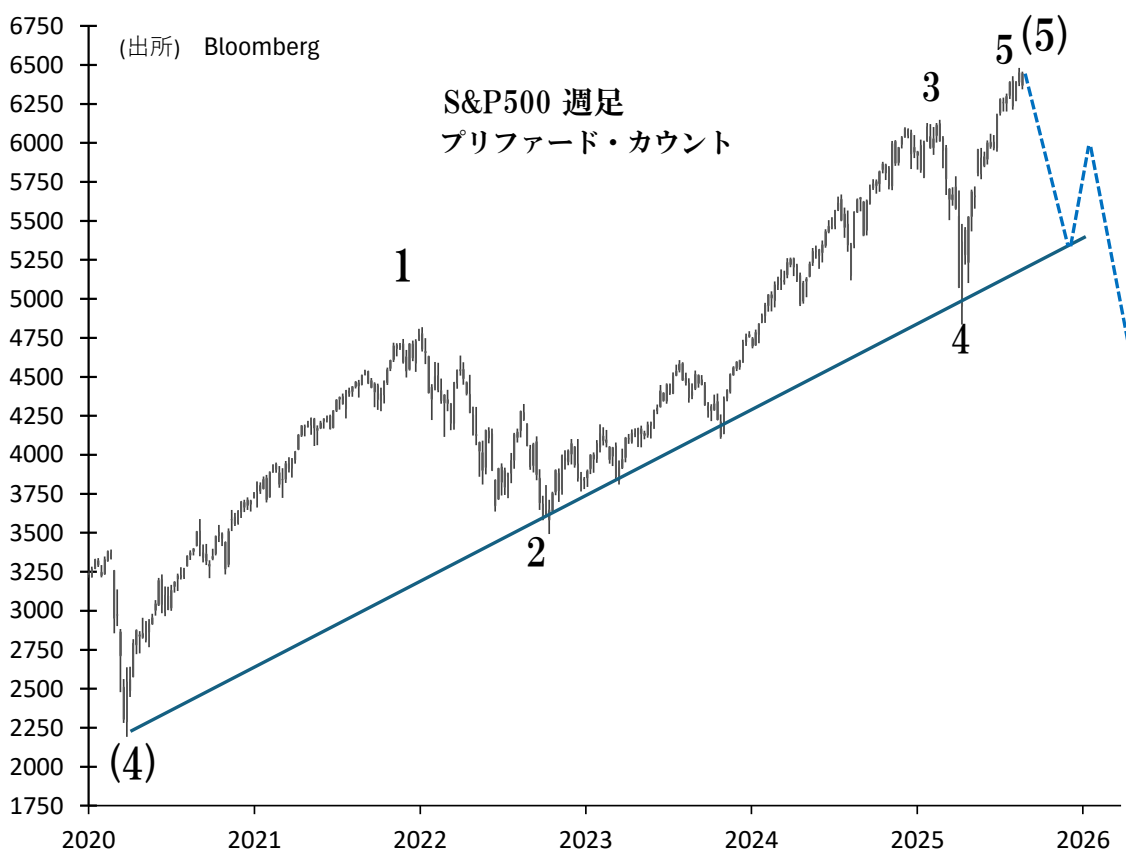
（プリファード・カウント）

4月安値(4835)からの上昇は、インターミディエイト級第5波に位置付けられ、それが終わると長期にわたる調整スタートとなります。それは4月安値を大きく下回ることが予想されます。

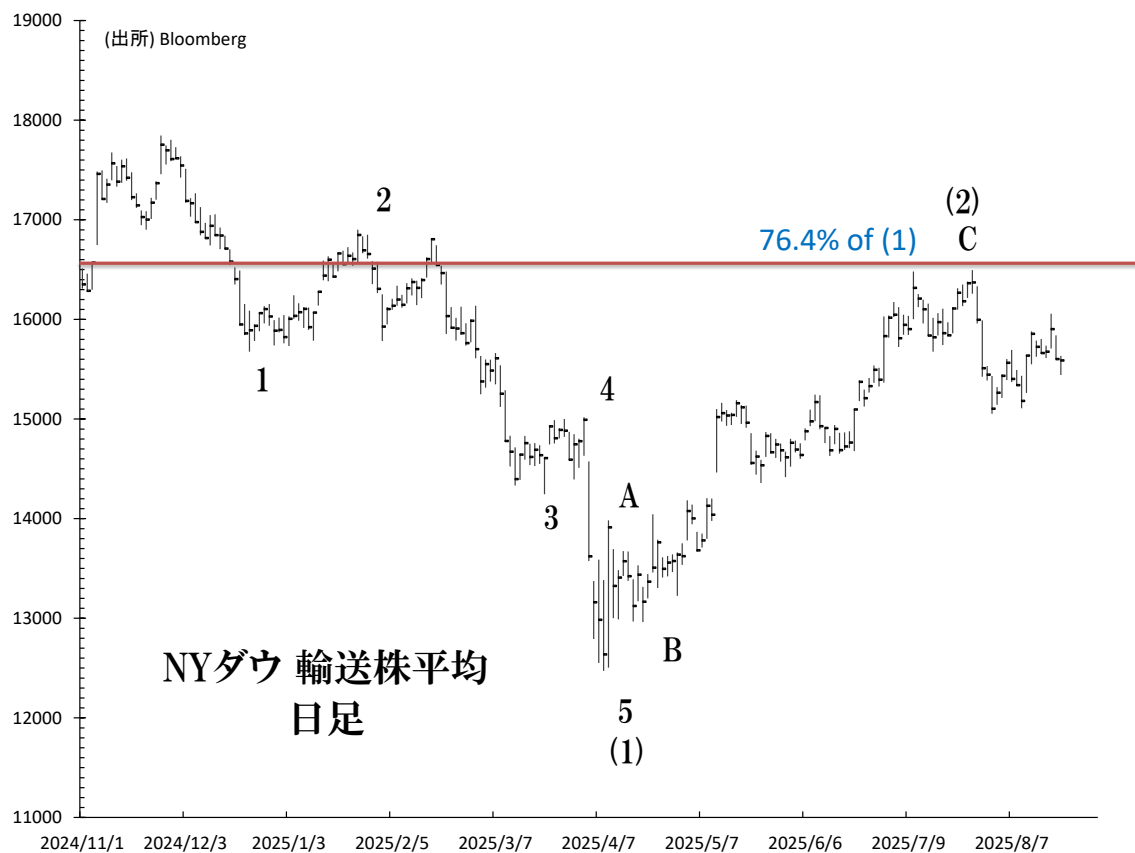
（オルタナティブ・カウント）

4月からの上昇は、トライアングル中⑥波のリバウンドに位置付けられます。

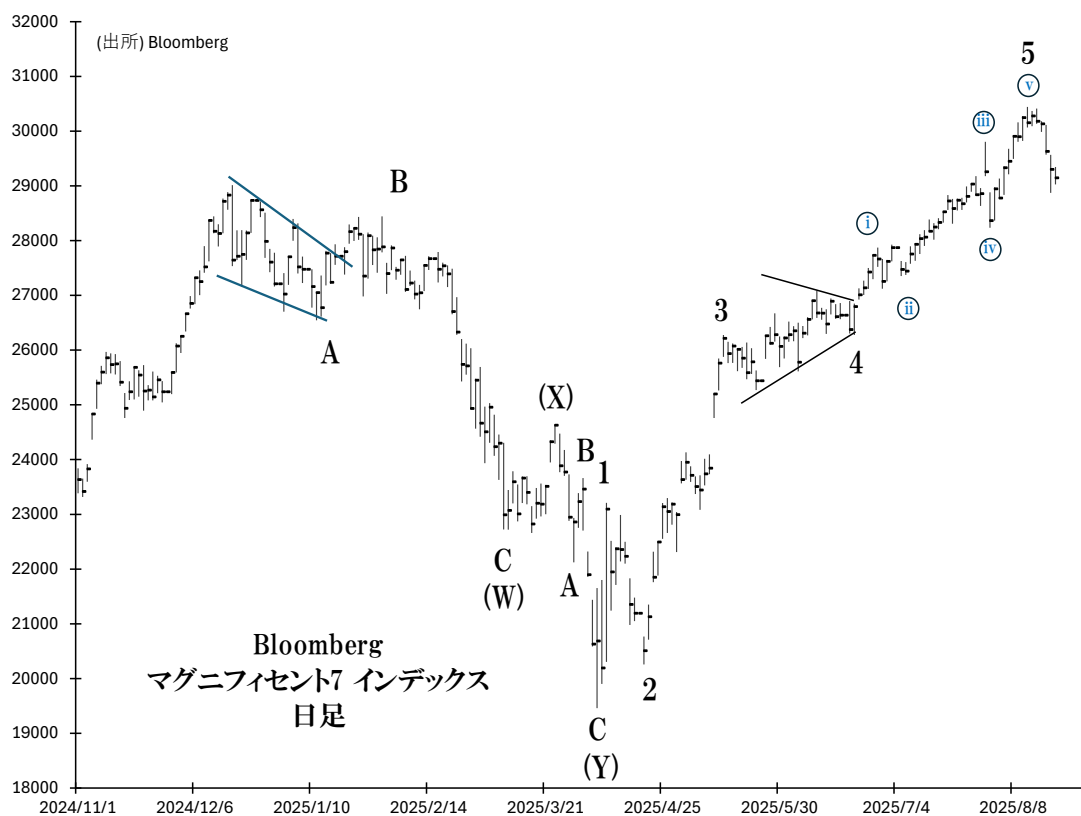
近々⑥波の下げがスタートするとみられ、それは②波(2月～4月)下げ幅に対し、62%～66%の大きさ(813～866ポイント)になるでしょう。そうすると⑥波によりS&P500は5400を下回る展開になりそうです。



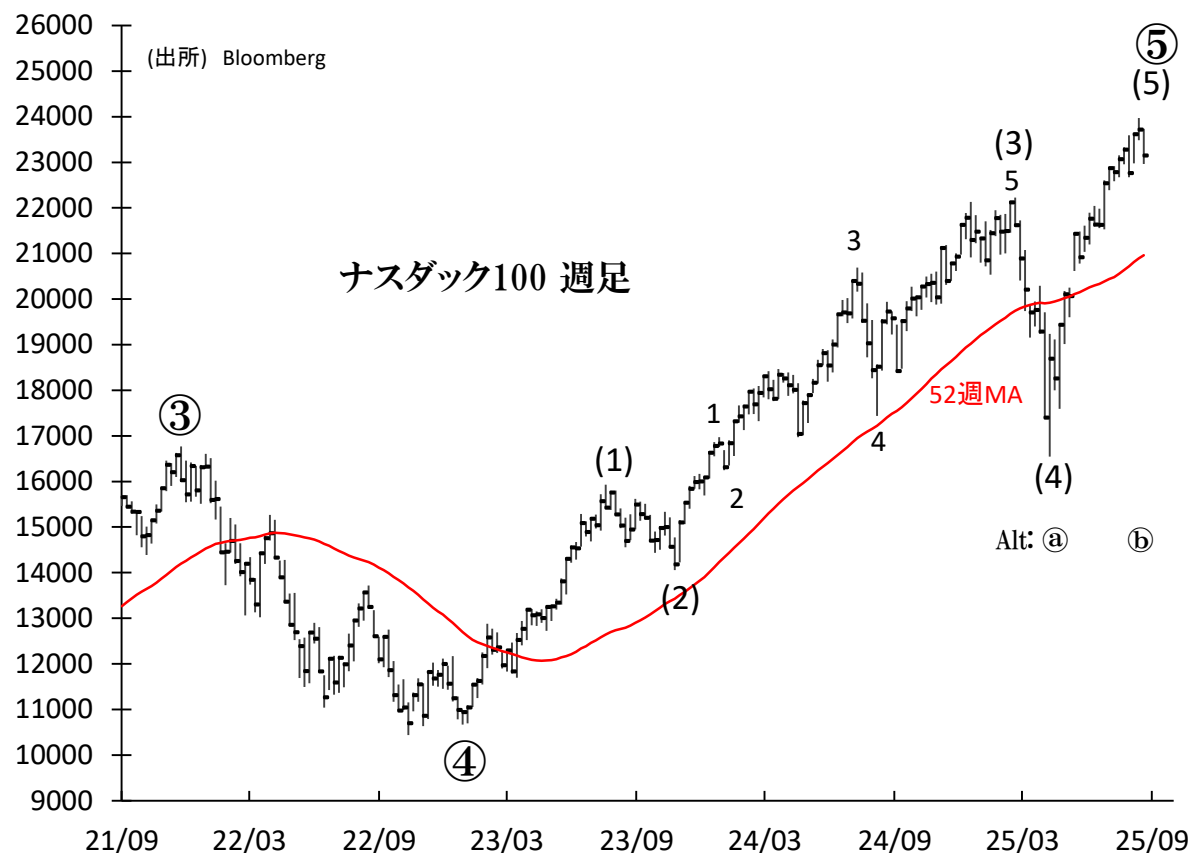
【ダウ輸送株平均】 最高値を更新したダウ工業株平均と「未確認」が続く



【マグニフィセント7】 4月からの5波構成による上昇は完成したか？



ナスダック



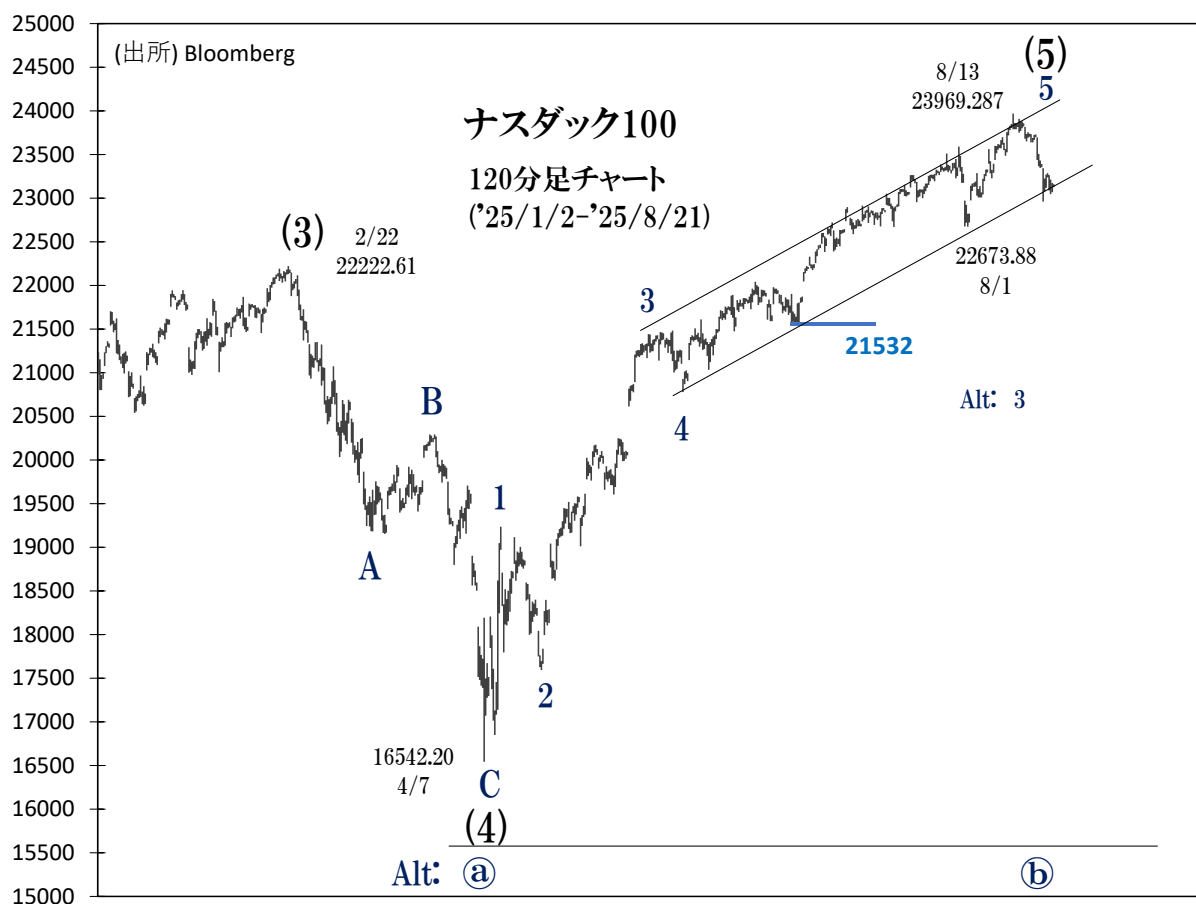
【ナスダック 100 週足 エリオット波動分析】

(プリファード・カウント)

4 月安値(16,542)からの上昇は、インターミディエイト級第(5)波の上昇に相当します。既に最高値を更新しており、第(5)波はいつ終わってもおかしくありません。遠からず調整局面が始まるとみられ、それは数年間ターム続く、長く大きなものになるでしょう。

(オルタナティブ・カウント)

4 月からの上昇は「(ランニング)トライアングル」中⑥波に当たります。これは S&P500 のオルタナティブ・カウントと同様であり、遠からず⑦波の下落に入る見通しです。これによると今後の調整規模は、想定されるシナリオではもっとも小さいと想定されます。それでも⑦波の下げ幅は⑥波のそれに対し 62%～66% となり、⑥波の高値からは 3500～3750 ポイントの下げになるでしょう。



【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

4 月安値 16,542 からの上昇は、インターミディエイト級第(5)波、あるいは、第(4)波「トライアングル」中⑥波とみられます。

8 月 13 日に付けた最高値・23,969 は、フィボナッチ比率からの上値想定レンジ[23,195-24,224]内にあります。当面(あるいは長期的な)の高値は付けたか、付けつつあると思われます。

22,673(8/1 安値)を下回ると最初の弱気トリガーが発動します(この場合、ナスダック 100 は当面 21,532 を目指す可能性があります)。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

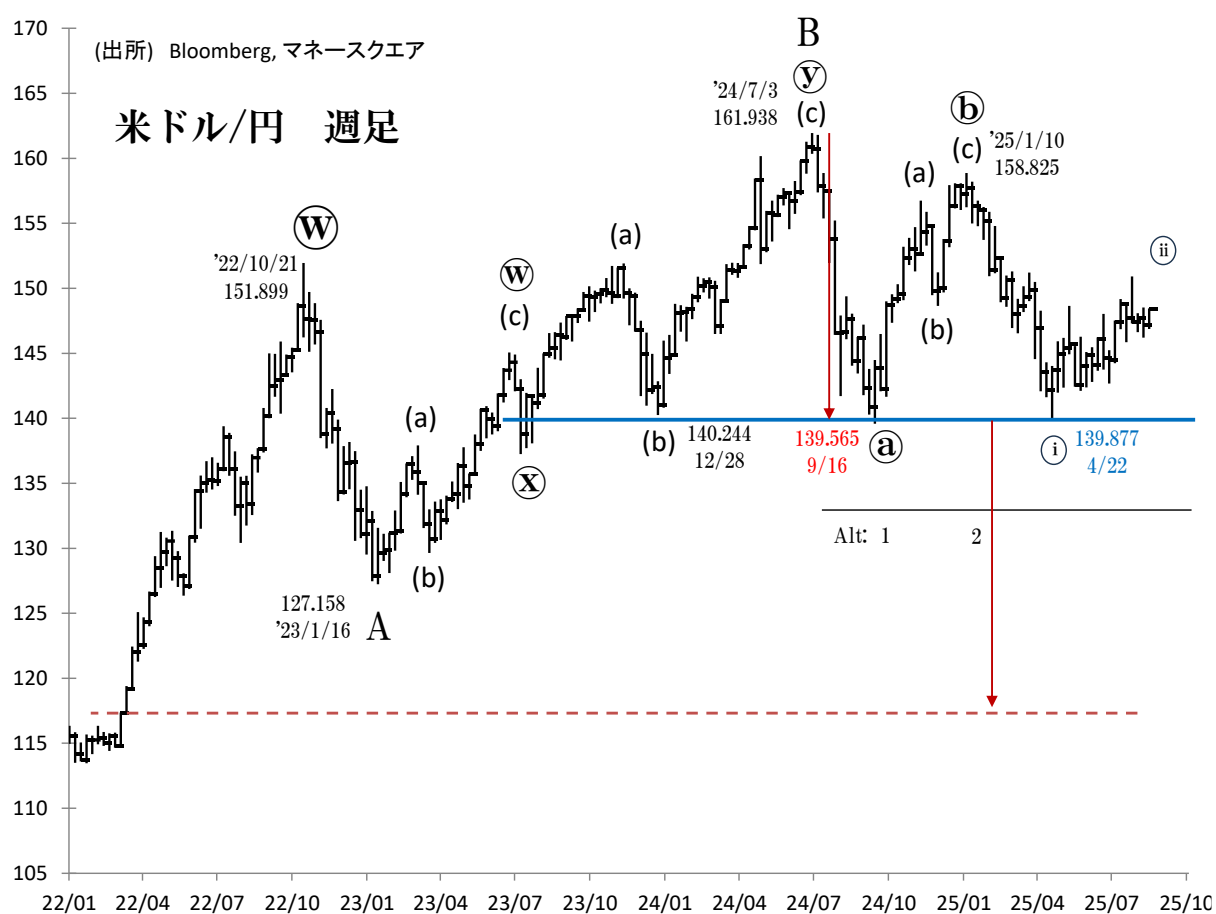
151.899 円(22/10/21)から⊗波「円高局面」が進行中です。この⊗波により米ドル/円(ドル/円)は、2028 年 4 月頃までレンジ相場を形成する、というのが基本シナリオ。24 年 7 月の 161.938 円は、15 年 6 月・125.860 円から 9 年目に付けた「8 年サイクル高値」とみられます。

22 年 10 月以来の⊗波が描くパターンとして大きくは、①[ランニング・トライアングル]、②[エクспанディッド・フラット]、これら二通りの可能性があります。

①の場合、現行 C 波は A 波安値(127.158 円)を下回りません。C 波は三波で構成され、まずは 2011 年からの上昇チャネルのセンターライン①137.705 円(9 月)がサポートレベルとみられます。

もっとも 139 円処を下抜くとヘッド・アンド・ショルダーズ型の天井パターンから明確に下放れ始め—上述したセンターラインで底入れせずに—フィボナッチ・サポートの[128.945 円]を試すと思われます。

②の場合は、現行 C 波(五波構成)はチャネル下限(②)を目指すような、より大きなドル安・円高が見込まれます。②の水準は 118.080 円(9 月)です。



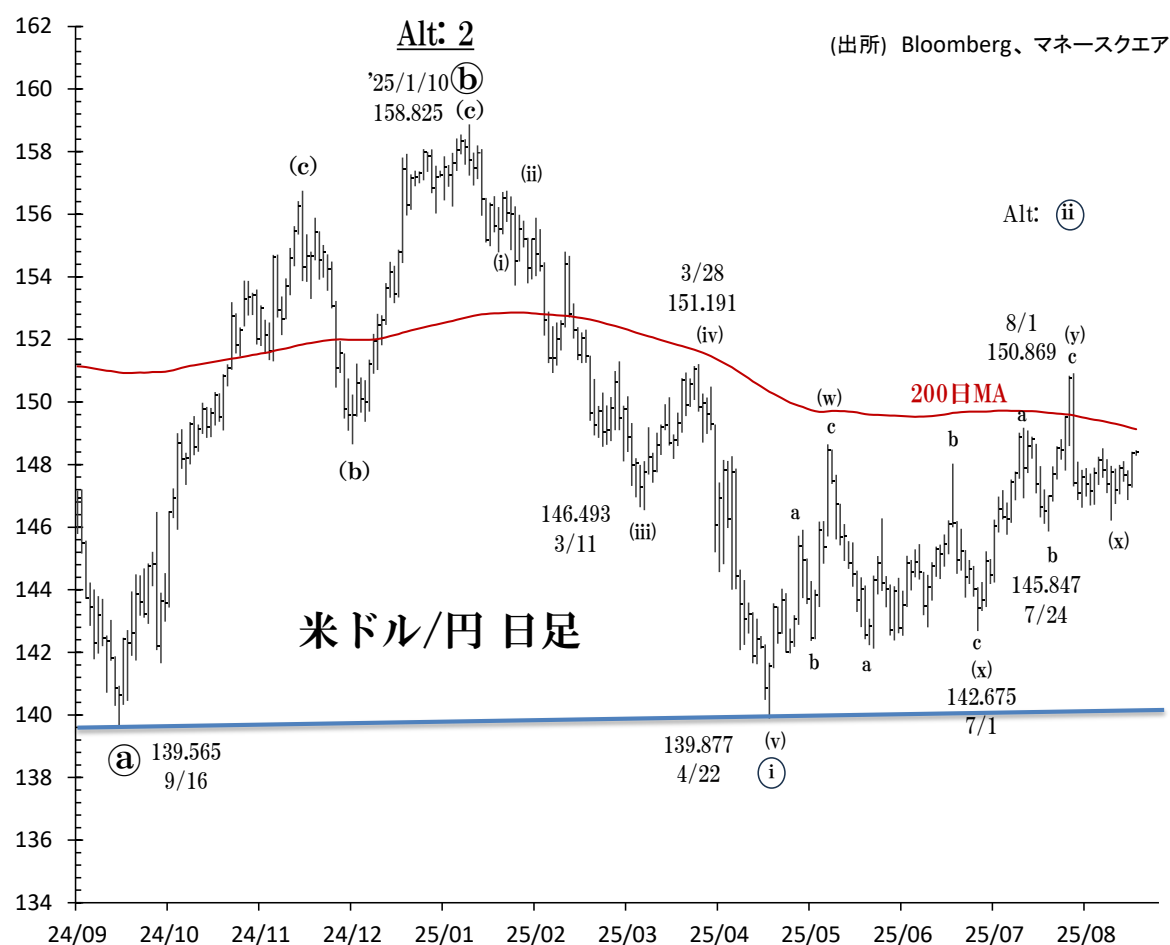
【週足 エリオット波動分析】

161.938 円(24/7/3)から C 波によるドル安・円高トレンドが進行中です。この C 波は(先ずは)三波構成 (a)–(b)–(c) が想定され、158.825 円(1/10)から©波によるドル安・円高が進行中とみられます。

今年 1 月からのドル安・円高を、第 3 波による下落とみることもできます。現時点でサブシナリオですが、これによれば、先々 1 ドル = 120 円試しが視野に入ります。第 1 波と第 3 波が黄金分割(1:1.618)比率関係になると仮定すれば、[122.625 円]という目標値が得られます。

4 月下旬以降のドル/円上昇は©波中マル ii 波に位置付けられ、それはまだ続いているとみています。

中長期でのドル安・円高基調に変わりはなく、ヘッド・アンド・ショルダーズの垂直目標値からは、いずれ 1 ドル = 120 円割れの可能性もみえています。



【日足 エリオット波動分析】

139.877 円(4/22)からのドル/円上昇はマル ii 波によるリバウンドです。4 月からの波形は複雑かつチョッピリなものであり、修正波としての特長をよく表しています。

筆者はマル ii 波が「トリプル・ジグザグ(w)-(x)-(y)-(x)-(z)」に発展するとみています。この見方が正しいなら、ドル/円は今後2～3カ月内に[151.586 円](1 月からの円高の 61.8%戻り水準)や[154.353 円](同 76.4%戻り)などを試すでしょう。なお短期的には、200 日 MA(149.130 円)を NY 市場終値で上回るかが注目されます。

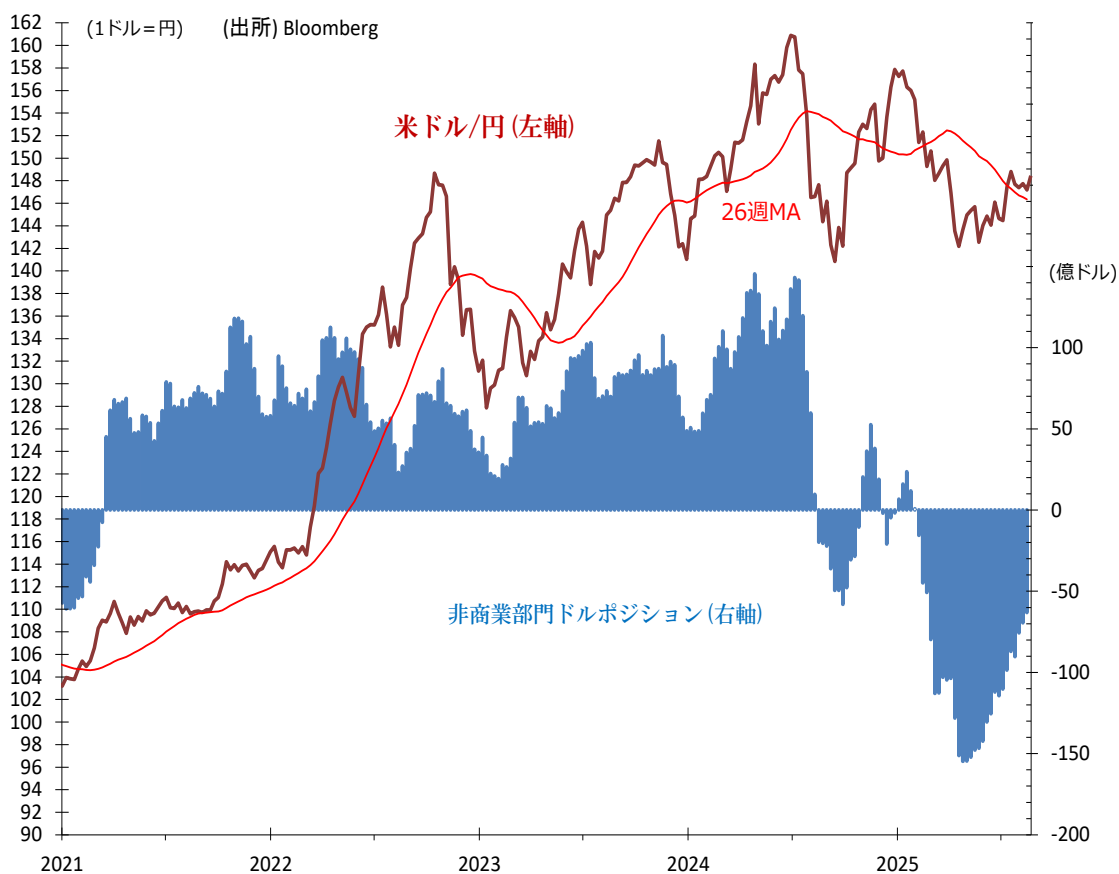
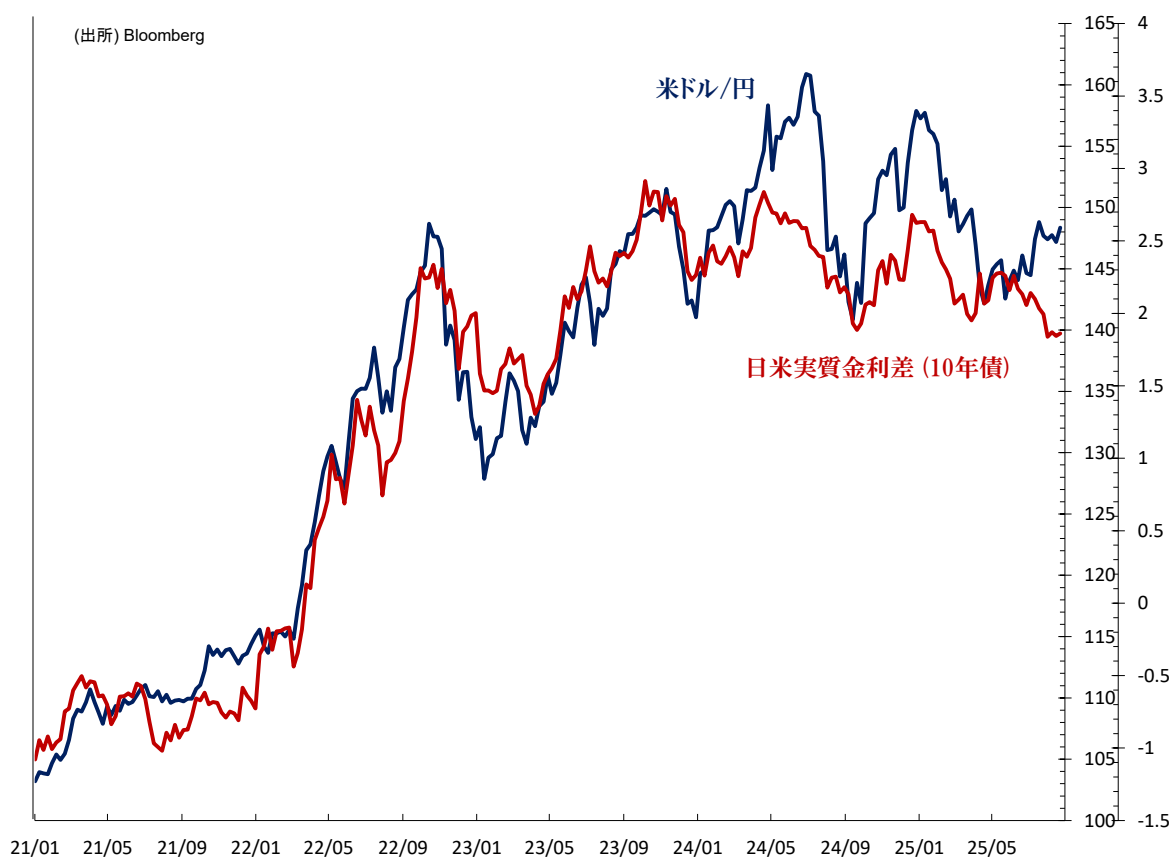
一方、今後 145 円処を明確に下抜くと、マル ii 波が既に終わった可能性を考慮する必要がありますでしょう。

金利差からのドル/円推計値

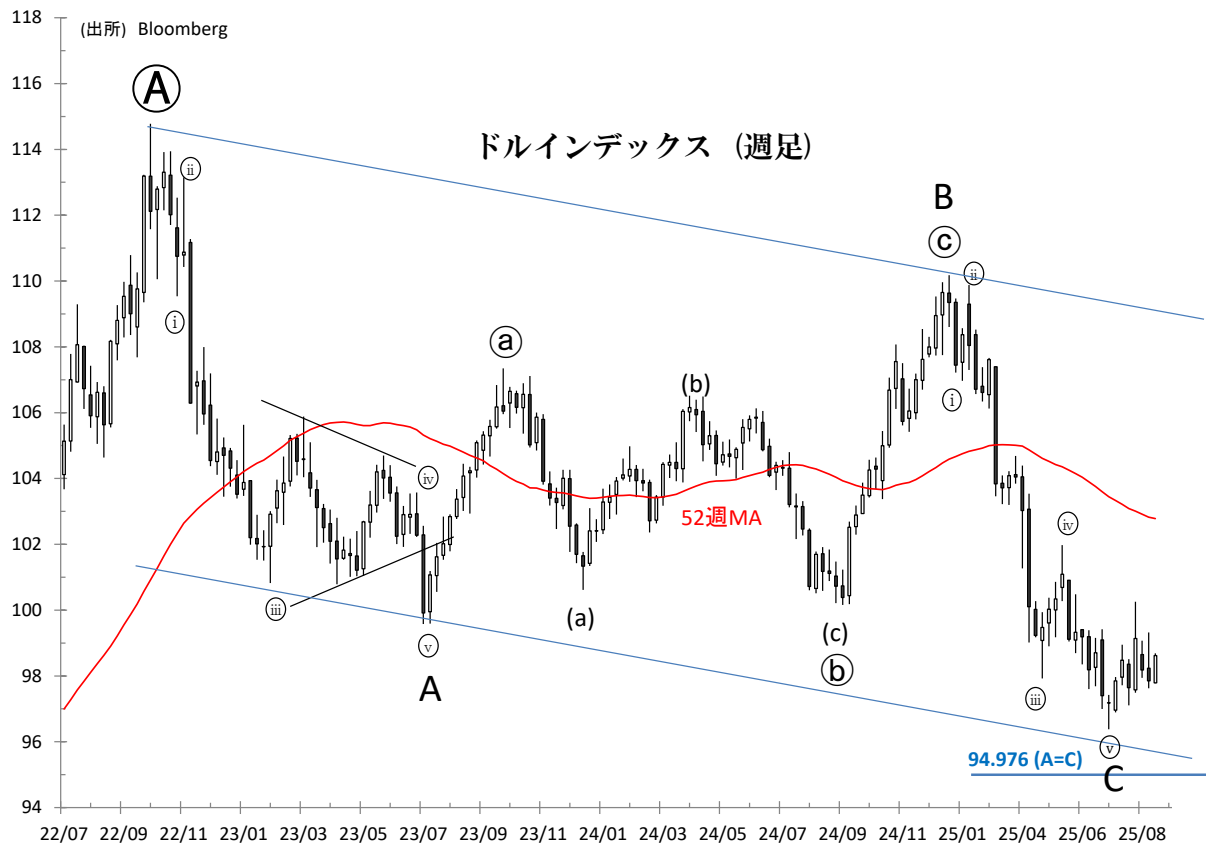
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[141.829 円]です。

投機筋の円買い持ち高が3週連続で縮小(2025 年 8 月 12 日時点)

IMM 通貨先物市場で投機筋(非商業部門)の円買い持ち高は、前週の 69.38 億ドルから 63.04 億ドルへ3 週連続で縮小し、2 月以来の低水準となりました。



ドルインデックス (ドル指数)



【エリオット波動分析】

年初から半年近く続いたドル安 C 波は 96.377(7/1)で終わった可能性が高いでしょう。それは、22 年高値からのジグザグ(A-B-C)の完成を意味するものです。

もっとも今回のジグザグ完成を以て、22 年高値からのドル安⑥波のすべてが終了した、とはみていません。筆者は⑥波は短くとも 2028 年頃まで続くともっています。

この見方通りだとすると、足元始まったドル高は(X)波に位置付けることが適当です。⑥波全体は「ダブル(トリプル)・ジグザグ」を描いていくでしょう。

ドル指数は、8 月から 11 月まで強くなる季節性があります。ここからすると、今後の 2～3 カ月はドル高傾向が続くとみられ、当面 101.977(C 波レサードイグリー・マル iv 波頂点)を目指すでしょう。

可能性は小さいと思われますが、今後 96.377 を下回るケースでは、当然 C 波が続いていることになります。この場合は 94.976 を目指すでしょう。これは、A 波と C 波が等しく下がる水準のことです。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社は、その正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差（スプレッド）があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率（為替リスク想定比率）を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率（為替リスク想定比率）は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長（金商）第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
